

## 特集「インタラクションの理解および基盤・応用技術」 の編集にあたって

水口 充<sup>1,a)</sup>

本特集号は、2014年2月27日～3月1日に日本科学未来館で開催されたシンポジウム「インタラクション 2014」(大会委員長：増井俊之、プログラム委員長：水口充)に連動して企画しました。

シンポジウム「インタラクション」はヒューマンコンピュータインタラクション研究会、グループウェアとネットワークサービス研究会、ユビキタスコンピューティングシステム研究会、エンタテインメントコンピューティング研究会(2011年より)の4研究会の主催で、1997年より毎年開催しています。対象分野は人と人工物、および人工物を介した人と人のインタラクションに関する研究全般で、基礎理論、要素技術から応用まで多岐にわたっています。本シンポジウムは、査読により精選された登壇口頭発表(シンポジウムでは一般講演と呼称)とデモンストレーションを主体とした対話発表(シンポジウムにおいてはインタラクティブ発表と呼称)から構成されています。最先端の研究の発表が聴ける、また体験できる場として好評で、この数年は600名を超える参加者を集めるまでに発展してきました。

インタラクションに関連する研究は進歩が早いことから、タイムリーな論文化の機会を提供することが非常に重要です。そこでシンポジウムの開催時期にあわせて本特集号を企画しました。ゲストエディタにはシンポジウムのプログラム委員長を務めた著者が就任し、シンポジウムのプログラム委員ほかインタラクション研究に関わりの深い研究者を編集委員に迎えました。

採否判定の方針は、採択率を意識することなく論文誌ジャーナルの判定基準で、読者にとって価値のある論文を採択することとしました。投稿数は21件で、ここ数年の投稿数と比べると少ない結果になりましたが、最終的に13件の論文を採択しました。採択率61.9%は高い値ですが採択基準を緩和したのではなく、むしろ査読者による評価の高いものが多かったことから質の高い特集号になったといえます。

また採録論文の対象分野は、基礎的な理論と分析、デバ

イスの開発、インタラクション処理手法、応用と実践、新規コンセプトの提案、と多岐にわたっています。インタラクションは非常に幅広い研究分野ですので本特集号だけで全貌を把握することはできませんが、研究動向を俯瞰できる内容になったと思います。

本特集号がインタラクションという研究分野のマイルストーンとして、当該研究分野に関係する読者の方々にとって価値あるものとなることを願っています。また、これまで直接的には関わってこれなかった方々におきましても、本特集号を通じてシンポジウムにも興味を持っていただき、口頭および対話による発表、あるいは聴講参加くださることを期待しています。

最後に、ご投稿いただいた著者の皆様、編集にご尽力いただいた幹事・編集委員の皆様、丁寧な査読にご協力いただいた査読者の皆様、本特集号の機会を与えていただき編集を支援いただいた論文誌編集委員会と学会事務局の皆様深く感謝いたします。

「インタラクションの理解および基盤・応用技術」特集号  
編集委員会

- 編集長  
水口 充 (京都産業大学)
- 幹事  
木村朝子 (立命館大学), 吉高淳夫 (北陸先端科学技術大学院大学)
- 編集委員 (五十音順)  
秋田純一 (金沢大学), 綾塚祐二 (電通国際情報サービス), 井上智雄 (筑波大学), 江渡浩一郎 (産業技術総合研究所), 岡本昌之 (東芝), 小野哲雄 (北海道大学), 加藤直樹 (東京学芸大学), 河野恭之 (関西学院大学), 後藤真孝 (産業技術総合研究所), 坂本大介 (東京大学), 志築文太郎 (筑波大学), 鈴木健嗣 (筑波大学), 寺田 努 (神戸大学), 苗村 健 (東京大学), 中西英之 (大阪大学), 藤波香織 (東京農工大学), 細部博史 (法政大学), 三浦元喜 (九州工業大学), 迎山和司 (公立はこだて未来大学)

<sup>1</sup> 京都産業大学  
Kyoto Sangyo University, Kyoto 603-8555, Japan

<sup>a)</sup> mmina@cse.kyoto-su.ac.jp